

「いたづら小僧日記」の原書

堀 部 功 夫

佐々木邦の人生観を早くに鶴見俊輔が、その名翻訳を中内正利・谷沢永一がそれぞれ注目していた。「いたづら小僧日記」については次の発言が記憶に新しい。

（佐々木邦氏の活躍期は明治大正昭和の敗戦後までと三代にわたる。今日から見ればすでに古い作品だが、漱石が今尚新鮮さを以て迎えられるのと同じように、それらはもはや古典といつてよい）
 （會田雄次）。「うちの子供たちは文庫版で佐々木邦の少年物をみんな読んでいたようだ。この点において親と子供が共通の少年少説を読んでいることになる。しかも私自身が佐々木邦を子供たちにすすめたわけでないから、自分たちで見付けてきたのである。そのおかげで佐々木邦の少年物が戦後も出ていることを知った。親と子供が同じ小説を読んで育つ、と言えばそれはすでに一種の古典になっていることであると言つてよからう」（渡部昇一）。

「いたづら小僧日記」がロングセラーであることは後で報告する

し、また実際これを読むと楽しいのだが、研究は少ない。

その緒を求めて、小文をつづろう。

調査にあたって、Library of Congress・大阪国際児童文学館・神奈川近代文学館・国会図書館・丸善株式会社・明治学院大学図書館のお世話になった。心から御礼を申し上げる。

一

「いたづら小僧日記」は百話より成る。各話を①～⑩としよう。

①～⑦の五五話が「悪戯小僧日記」として『明星』に次のごとく発表された（いまこれをA本文とよぶ）。

①～③ 明40・11・1刊。 ③②～③⑥ 明40・12・1刊。

③⑦～④① 明41・2・1刊。 ④①～④⑤ 明41・3・1刊。

④⑥～④⑧ 明41・4・1刊。 ④⑨～④⑯ 明41・5・1刊。

④⑰～④⑲ 明41・6・1刊。 ④⑳～④㉒ 明41・7・1刊。

③④⑦⑩ 明41・8・10刊。 ⑦⑩ 明41・10・5刊。

のち、内外出版協会から、①④⑦を『いたづら小僧日記』（明42・5・15、管見本は明42・9・1刊第九版）、②⑤⑧⑩を『続いたづら小僧日記』（明42・10・25、管見本は明治44・7・20刊第十六版）として出版される（これをB本文とよぶ）。

以後の本文に

- C 縮刷合巻『いたづら小僧日記 おてんば娘日記』（大6・6、弘学館）
- D 日本小説文庫一三二『いたづら小僧日記』（昭7・6・15、春陽堂）

E 家庭文芸名作選『いたづら小僧日記』（昭22・3・25、家庭社、管見本は昭22・4・15刊再版）

F 春陽文庫

G 佐々木邦ユーモア小説選書7『いたづら小僧日記』（昭29・12・1、東方社）

があるようで、また邦没後に

- H 『少年少女世界の名作文学四八』（昭和42・1・20、小学館）
 - I 『佐々木邦全集二』（昭49・10・10、講談社）
 - J 新学社文庫四八『いたづら小僧日記』（昭50・4・1、新学社）
 - K 福武文庫1020『児童文学名作全集2』（87・1・30、福武書店）
- 各所収本文がある。これらのうち、B・Eの初版およびC・Fは未

「いたづら小僧日記」の原書

見であり、細い異同に立ち入れないでいる。

著者表示は、Aが（佐々木邦）とのみ、その後（作者生前分）は次のとおりである。

	表紙	扉	奥付
G	佐々木邦	佐々木邦	著作者 佐々木邦
F			
E	佐々木邦	佐々木邦	著作者 佐々木邦
D	佐々木邦	佐々木邦	著者 佐々木邦
C	佐々木邦 邦訳著	佐々木邦 邦訳述	著作者 佐々木邦
B	佐々木邦 邦訳	佐々木邦 邦訳述	著作者 佐々木邦

〈訳〉明示の落ちた版もあるとはいえ、佐々木邦自身、『いたづら小僧日記』の原書について次のような発言をくりかえしている。

○ 原書は無名氏著悪戯小僧日記といふ。是は其の所々を訳し出し、又自分の考へを加へて成つたものであるから、訳としては極めて不忠実である。さりとして著といつては不道徳になるから、兎に角訳として置いた。（Bの「はしがき」）

○ 無名氏著 A Bad Boy's Diary（略）から面白いところを元談半分に訳出し、其に自分の気紛れな考へを加へたもの（Cの「はしがき」、未見、尾崎秀樹の引用に拠る）

○ 或日、私は丸善へ行つて、無名氏著 A Bad Boy's Diaryといふ本を偶然手に入れました。読んで見たら非常に面白かつたの

で、その翻訳を思ひ立ちました。マーク・トウエーンと夏目さんの刺戟が頭の中にあつたのです。この翻訳は「いたづら小僧日記」として後日出版しました。(昭5・10・20、講談社『佐々木邦全集』)

○ 或日、例の通り丸善へ行つて〔略〕A Bad Boy's Diaryを買つて、電車の中で読みながら帰つたが、実に面白い。就職難で遊んでいた折から、これを訳して見ようという氣になって、早速やつてのけた(昭16・8・8、春陽堂『豊分居雜筆』、講談社新版全集五に拠る)

○ これは翻訳ですが作者は無名氏です。(昭36⁽⁴⁾談)

邦の全著作に目を通し切れていないので、他にあるかもしれないが、これだけでも十分であろう。邦は機会があれば「いたづら小僧日記」の主体が無名氏著A Bad Boy's Diaryの翻訳であるといつてわり続けていたのである。

一一

ところが現在、邦発言はこのままでは通用しにくい。「いたづら小僧日記」は邦の創作であるという説が出、支配的になつてゐるためである。依然邦発言をただ敷衍したのみの記述もありはするが、創作説にはおかぶりしたそれらはもはや説得的でない。

創作説はHあたりから顕著になつた。Hは「いたづら小僧日記」を(日本編)に抄録し、例えば太郎が家を出して伯母さんの家へ行く条に(おばさんの家は、たぶん東海道の三島を想定して書かれたものと思う。)と注し、すでに本作を全然翻訳していない。

決定的な創作説は、指方龍⁽⁵⁾に始まる。指方は邦発言を真向から否定する(秘話、逸話)を公開した。

佐々木邦先生の処女作は、ほんとうは「いたづら小僧日記」である。ほんとうは、という意味はあとでわかるが、この原稿を与謝野鉄幹主宰の文芸雑誌「^{マユ}昂」に持ちこんだ。それが採用されたが、佐々木邦^{マユ}訳で原作者の名はなかつた。なぜ、自分の創作として持ちこまなかつたかの理由として、一「無名の青年が、雑誌社に原稿を持ちこんでも、なかなか読んではくれないところが、翻訳だといえは興味をもつてくれるからね。」一与謝野鉄幹は、まんまと引つ掛つたわけだが、無論、おもしろいから載せたわけである。一まもなく「いたづら小僧日記」は、ある小出版社から刊行された。紙装の粗末な本だったがよく売れた。それで続編も出した。やはり佐々木邦訳だった。後年、これを一本にまとめて訳を消した。一この作品に出てくる悪童たちの行動範囲は、もとの赤坂溜池を中心に、遠くは泉岳寺にまで及んでいる。

この指方文の出現で、局面は大転換した。従前、『いたづら小僧日記』(A Badboy's Diary)の翻訳⁽⁶⁾とか、(作者はアンノウンマン(無名氏)で“A Badboy's Diary”の翻訳である⁽⁷⁾)とか書いてきた尾崎秀樹も、早速指方説を用い(推定)以後記述を変更した。尾崎はさらにふみこんで A Bad Boy's Diary を架空の書と決めつける。

(アンノウンマン(無名氏)の翻訳という形をとっているが、アンノウンマンというユーモア作家がいたわけではなかった。無名の若い作家の創作であるよりは、翻訳としたほうが活字になりやすいというのがその理由だったらしい⁽⁸⁾)と書き、『いたづら小僧日記』などの処女出版は、翻訳と称しているが実際には創作で、無名の作者が作品に箔をつけるため、そのように偽ったのだともいわれる。その証拠にア・ナウマン作、つまり無名氏作となっていたというオチまでついている⁽⁹⁾と述べ、(アンノウンマンの作品の翻訳という形をとったが、実際には創作だった⁽¹⁰⁾)と記す。

岡保生は、指方説を鵜呑しませんが A Bad Boy's Diary 翻訳説にも慎重で創作説に傾く。「訳」といっても、英米文学からヒントを得たり、部分的に翻案したりしたところはあるにもせよ、大体は邦の「著」と見てよいのではないだろうか⁽¹¹⁾とふれている。「いたづら小僧日記」にヒントを与えた英米文学として岡が考えているのは(マーク・トウェイン)である⁽¹²⁾。

『いたづら小僧日記』の原書

上笙一郎は、『A Badboy's Diary』という小説が英米文学のなかにあると聞いたことはないし、当の邦自身があの世の人となった今となつては、『翻訳か創作か』どちらが本当なのか確認すべき手だてはない⁽¹³⁾と言い、(しかし、『いたづら小僧日記』をよく読んでみると、翻訳だという述懐も創作だとする主張も共に真実だと言わざるを得ないように思う。——というのは、この作品は日本の中流家庭での話として構成されているわけだが、たとえば舞踏会を家でやるとか教会へ行くとか、明治末期の日本ではなかなかあり得ない摩登な風俗がいたるところに出て来るが、これは原作が欧米の作品であることを疑わせるに十分だ。けれども、一方ではその風俗や人物が違和感を少しもあたえず、みごとに日本化されているのであり、その面を高く評価すれば、『いたづら小僧日記』は邦の創作だと言えなくもないのである⁽¹⁴⁾)と思案して(結局『いたづら小僧日記』は、『翻訳』というよりは、原作を佐々木邦の個性に合わせて大胆に切り取った『翻案』作品だということになるのではあるまいか⁽¹³⁾)と総括しようとした。ただし(原作)を明確にせず、A Bad Boy's Diary の存在には否定的である。

一般に創作説が広まり、定説化した。高橋康雄も(翻訳物として発表した『いたづら小僧日記』(諷刺作家やユーモア作家が匿名や筆名で作品の効果を高めるのと同じとみてよからう⁽¹⁴⁾)と後を継ぎ、

神谷忠孝も「処女作『いたづら小僧日記』（明42・5、内外出版協会）はアン・ウンマン（無名氏）というユーモア作家の作品からの翻訳というかたちをとっているが実際は創作である。」と踏襲した。⁽¹⁵⁾ 指方・尾崎説が流布する昨今である。

二

しかし、創作説を主導した指方回想には疑点がある。その一に、事実として、「明星」発表時に指方のいう〈訳〉表示がないことである。その二に、当時の気風はすでに翻訳尊重でなく創作尊重であったことである。創作が翻訳より尊ばれていた実態は、例えばとして「私の読みました小説」（明39・11・20『中学世界』）に明白である。とし子曰く――

独歩は短編は犀利な男らしい筆で、紅白粉を洗ひ落した様な筆振りが好きなので御座いますが、時々私共の様な浅学な女にまでも、「あらこれは何々の翻訳だ」と、すぐに看破し得る様な外国物にまで、原作者の署名もなければ、翻訳とも翻案とも断つて御座いませぬが、斯様な事はよろしい物でしやうか、すると何か変わった趣向で、一寸目につく様ながありましたも、「又西洋種ぢやないかしら？」なんて、立派な創作に対してまで、痛くない腹を探られると云ふ事になつて、作家だつて割の

悪い話になります。併し斯様な事は此作家のみでもない様で、たしか去年の夏あたりの、新小説の巻頭を飾つた一小説なんぞ、ツルゲネフの有名な、エルステ、リーベの始めを少し脱いた許りの、立派な翻訳だと思はれますのに、たゞ風葉とのみの署名で済して居りました。又夫と前後して出た『一本杉』とか云ふのも、この原書は私は存じませんが、たしか矢張りツルゲネフの翻案に相違ないと云ふ話を聞いた事が御座います、死んだツルゲネフが又蘇生つて、日本で風葉と改名したのなら知りませんけれども、世間を盲目にした様な拙い仕打が、何所／＼までも厭で御座います。

と。その三に同じ粉飾説でも指方回想と反対内容が伝わっていることも付け加えておく。十和田操は座談会「佐々木邦と明治学院」(74・11・1『白金通信』)で次のように語っている。

「邦が」アメリカの滑稽話を集めた本を読んで、さかんに翻案して、ある東京の出版社から創作風に発表する。「これはウソつぎだ。翻案じゃないか……。」という手紙もあつたが、当時のことだから、気がつかずに不問にふしてきたようで……これが「明星」発表時の話であれば、創作説は逆転する。

そもそも A Bad Boy's Diary は架空の書であろうか。個人が聞いたことはないからといって存在しないということにもちろんなら

ない。この点を調べないで種々の推量するのは早計に過ぎる。

実は著者表示なし A Bad Boy's Diary が存在する。異版を未調査であるけれども、ニュー・ヨークの J. S. OGILVIE & COMPANY 版で (COPYRIGHT, 1880, BY STREET & SMITH) と刷られた本を見ることのできた。

さらに同書の、邦とは別人による翻訳、すなわち伊東六郎訳『バッドボーイ日記』(大4・6・19、高踏書房)も管見に入る。語学能力の欠ける私もこの伊東訳に助けられて、論を続けられそうである。書き出しを抄引しよう。

原書

I was ate years ole yesterday, an' mamma she says to me :

"Georgie, wot would you like for a burthday present?"

So I said a "diry," cause all my growed-up sisters keep a diry, an' I thought it would be about the figger. So mamma she got me one. I wanted to begin it all rite, so I stole up to Lily's room to copy suthin out o' hern :

伊東六郎が訳書「はしがき」で言うように〈子供の書いたものになつてゐるので、所謂片言交りの文章でむつかしいと云ふよりは頗る読みにくい〉原文である。

「いたづら小僧日記」

「いたづら小僧日記」の原書

(乃公は昨日で満十一になつた。誕生日のお祝に何を上げやうかとお母さんが言ふから、乃公は日記帳が欲しいと答へた。するとお母さんは早速上等のを一冊買つて呉れた。姉さん達は三人共日記をつけてゐるから、乃公だつてつげなくちゃ幅が利かない。―物は最初が大切ださうだ。始めて逢つた時可厭だと思つた人は何時までも可厭だとは、お花姉さんの始終言ふ事だ。それで乃公も此最初を巧くやる積りで、色々考へて見たが、どうも面白い事が書けない。すべて物には始めがある。正月は明けまして、始まり、演説は満堂の紳士淑女諸君で始まり、手紙は拝啓陳者で始まる。しかし日記は何で始まるものか、始からして分らないのだから、全然見当がつかない。弱つちまふ。―お花姉さんには何んな事が書いてあるか知ら、一つお手本を拝見してやらうと好い所に気がついて、乃公は竊と姉さんの室へ上つて行つた。)

主要人物も

George Hackett	太郎
Lily	お花姉さん
Montague De Jones	清水さん
Sue	お春姉さん
Moore	森川さん
Bess	歌子姉さん
Betty	お島
Johnny Browns	忠一

が対応する。

邦は原書に拠つて、第一に、日記体独白の形をそのまま採用した。加害者による一方的語りで、被害者側の痛みに入らざる隙を与えない。そこで話は無責任一点張のうち陽気に進行する。

第二に、痛烈な諷刺を記した。(悪戯小僧)の目で、成人のタテマエ社会をわらうことがしばしばである。

第三に、ジョージのかなりひどい悪戯も写した。悪戯好きの読者が読めば快哉を叫ぶ内容が請け合われた。

細かい点を言い足せば、邦の本で首をかしげたところが原書を見れば解決する。⑦ナイヤガラ行の条(お母さんは大きい姉さん二人を片付けるのと、お歌さんの縁談とで、くさくさしてゐる上に、乃公が獅子と逃げたり、風船へ乗つて行方知れずになつたりして、余計な苦勞を掛けたものだから、少し健康を傷めた。)や、⑩(乃公はお鳥との約束は破談にして、此子(清子さん)と結婚しようかと思つた位だ。)の傍線部が唐突で面くらう。しかし、原書を読めば、風船旅行が二五章に、つまり二七章のナイヤガラ行以前に語られてゐるし、早くに (If I ever do marry any girl it will be Betty) (p. 47) と記されてあつたから、腑におちるのである。

四

「いたづら小僧日記」にある記事が、原書の何章にあたるか、氣付いたところを表示する。

19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1			
63	63	63	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×			A
46 今日は大内	45 乃公は実際	44 家から手紙	43 今日は学校	39 金曜日は悪	39 今日は応接	37 家郷病は悲	35 乃公は地理	35 乃公は丈が	34 家を出る時	33 乃公は今度	29 待ちに待つ	25 お母さんの	19 今日は久し	17 今日からは	16 今朝は大変	16 二週間とい	8 今日は家の	1 乃公は昨日	P.~ 書出五文字		B
																					C
29	28	28	28	24	24	22	22	21	21	20	18	15	11	11	10	9	5	1			D
30	30	29	29	25	25	24	23	23	22	22	20	17	13	12	12	11	7	2			E
																					F
34	33	33	33	29	29	28	27	27	26	26	23	21	16	15	15	14	9	5			G
×	322	×	322	320	320	320	319	×	318	318	×	×	×	×	×	318	314	312			H
17	17	16	16	15	15	14	14	14	14	13	12	11	10	9	9	9	6	5			I
43	42	41	41	37	37	36	35	34	33	33	30	27	22	21	20	14	9				J
45	44	44	44	41	41	40	39	39	38	38	35	33	29	28	28	26	23	19			K

佐々木邦

XV 127	126	XIV 125	XIV 124	119	XV 127	XIV 116	XIV 118	117	×	XIII 111	III 23	21	17	15	II 14	14	I 9	7	章 P.~	原書
五 193	190	190	五 187	180	五 222	五 177	五 179	178	×	五 169	三 27	23	17	14	二 13	12	一 5	1	章 P.~	伊東

42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20
60	60	110	109	109	107	50	49	49	47	46	72	72	71	71	70	70	69	68	67	66	66	64
99 今朝は早く	98 此二三週間	95 小さい子供	91 此頃歌さん	90 一体お歌さ	87 お父さんは	83 忠公の家の	82 伯父さんは	81 乃公は三日	75 大阪の伯父	73 今日は日曜	71 今日は素敵	70 今日は一日	68 今朝は早く	67 颯を拵へや	66 森川さんと	65 今日は午前	63 今日は昨夜	58 此頃は音な	56 昨夜は退屈	54 乃公のゐな	54 奉公にやら	47 今日は学校

62	62	59	57	57	54	52	51	51	46	45	44	43	42	41	41	40	39	36	35	34	34	30
62	62	60	58	57	55	53	52	52	47	46	44	44	43	42	41	40	40	37	36	35	35	31

69	68	66	63	63	60	58	57	57	53	51	50	49	48	47		46	45	41	40	39	39	35
335	×	×	×	×	334	333	333	330	328	×	328	327	×	×	×	327	×	×	×	323	×	323
32	32	31	30	29	28	27	27	27	25	24	24	24	23	23	23	22	22	20	20	19	19	17
81	81	78	76	75	72	70	69	68	63	61	60	59	58	57		56	54	51	49	48	48	44
76	76	74	72	72	69	66	66	66	62	61	60	59	58	57	57	56	55	52	51	50	50	46
VII 55	54	XXI 183	VIII 60	×	VI 44	XXVI 228	205	XXIII 204	201	XI 93	XX 175	XVII 158	XIX 155	XIX 166	×	VII 51	49	IV 33	32	×	130	
七 79	79	三 273	八 86	×	六 61	三 337	307	三 306	299	土 142	三 262	六 237	五 233	五 250	×	七 77	七 73	六 69	四 44	42	×	198

100	99	98	97	96	95	94	93	92	91	90	89	88	87	86	85	84	A	
×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	B	
85 右を見ても																	P. ~	
73 今日日は日曜																	書出五文字	
71 今日日は五分																		
68 今朝は七分																		
65 大に憤発し																		
64 お父さんに																		
61 何だか妙に																		
60 暖い家庭を																		
56 昨夜は室へ																		
55 乃公は停車																		
54 帰途に川端																		
51 今日日は六公																		
51 今朝になつ																		
49 今日はお客																		
48 牧師も全快																		
45 朝もパンと																		
41 お鳥が見つ																		
																	C	
174																	D	
172																	E	
																	F	
184																	G	
×																	H	
83																	I	
209																	J	
×																	K	
XXX 267	XXV 219		×	IV 32	XII 96	IV 31	IV 28	III 26	×	XXIX 259	XXV 215	V 36	章 P. ~	原	書			
三 391	三五 325		×	四 43	三 145	四 39	三 34	三 33	×	三九 379	三三 320	五 49	章 P. ~	伊	東			

佐々木邦

邦は原書の記事を細分し配列を変えた。

原書との相違は、配列替だけではない。話そのものの削除と付加とがある。小異（各話中の改変）を措き、まずそれを概観しよう。

削除では、一に同工類話の整理がある。

二に、破壊的な大悪戯がカットされている。

鉄橋を爆破した話（P. 167 ~ 170）や、機関車を勝手に動かして貨車七

輛共粹碎させた話（P. 233 ~ 237）など。

三に、政治的活動部分を削除した。ジョージが選挙運動にベストをつくした（P. 251 ~ 257）り、政治運動に首をつっこむ場面（P. 262）

など。大状況にからむところを避けたのである。

付加では、一に各エピソードをつなぐものと、二に小悪戯十例程

とである。

後者は次の通り。

⑤②義士墓の看板（ぎしばか）を忠公に命じ（ぎしばか）と改める。

⑤⑨お歌姉さんに会いに来る先生の持ちものをかくす。

⑥③財産差押ごっこ。

⑦③裸で遊んでいて、お巡りさんにしかられる。

⑦④お鳥をからかって顔中墨だらけにする。

⑦⑤理髪師にちよっかいを出し客の眉毛を落とさせる。

⑦⑦学校へ行ったとうそをついた日は祭日だった。

⑧⑨ 通行人が鬻か否かて由公と賭せする。

⑨⑩ 子供をからかう易者を、川の中へ突き飛ばす。

⑨⑧ 軍人の帽子徽章を学校のそれと付け替える。

いずれの悪戯も原書の過激さに及ばない。

次に、共通部中の小異も見ておこう。

原 書

Mr. Sloocum preached a offul long sermon, that made me slepy and hungry. I wish I had not taken my Chinese toy to church in my pokkit; coz I was so tired I took it out on the sly gust to see if it was all rite, an' the pin come out suddin by axdent, and fore I new it that long black thing flue rite out in church, an' struck Mr. Sloocum slap across the nose wile his eyes was shut saying a praver. Then it tumbled down into the quire, an' wiggled around like it was alive.

The yung ladies who sing in the quire thought it was a snake. They gumped up on their seats — such a scen in church was peckleky disgraceful.

〔中略〕

I felt as if I wood sink thru the flore, coz all the peple looked at me as if they gnu who did it. I dropped the hymn book I hurrid

so to find the hymn, an' when I stooped to pick it up, the pistol Pat Finegan lent me to see if I wood like to buy it, fell out my tuther pokkit and iexploded.

「いたづら小僧日記」

〔牧師の祈祷が長いので〕勝手にするがいいと思つて、落した讚美歌を取る積りで踞むと、衣囊に入つてた玩具のピストルが落ちました。落ちたばかりなら宜いけれどパチッと破裂したから、因つてしました。皆が乃公の方を見て怖い顔をした。お歌さんは真赤になつて、凝つとしていらつしやいと言つた、乃公は自分の衣囊の中へ消え込みたい位体裁が悪るかつた。ピストルを拾ひたいけれど、お歌さんが番をしてゐるから手を出すことが出来ない。さうかと言つて膝の上へ両手を置いてるのも角力取のやうで可笑しいから、乃公はズボンの衣囊に突込んだ。何かある。あ、此は昨夜お客さんに載いた自動奏楽器だなど気がついた時には、最早『一つとや』を歌ひ出した。乃公は如何することも出来ない。いくら握つても『お飾り立てたり松かざりい〜』をやつてゐる。邦はピストルを本物から玩具へ変え、たわいない悪戯としてゐる。オルゴールの「一つとや」も可笑しい。

温和的への改訂はここでもハッキリする。邦の主要関心は小状况における子供らしい悪戯、その惹起する明るい笑ひにあった。

さらにB「はしがき」で

此書には別に教訓は含まれてゐない。

とわざわざ断り、〈教訓〉を気にするあたり、邦自身の善導志向も推量されなくはない。

「いたづら小僧日記」は、このような邦による、A Bad Boy's Diaryのまざしく訳著であった。

創作説横行を天国から見て邦は悪戯っぽい微笑を浮かべているであろうか、いや、聞くところの邦はきわめて謹厳で、おそらく一顧だにしないように空想される。ただし、〈いたづら小僧〉なら話は別である。さんざん騒ぎを大きくしたあとで、日記に〈乃公はちやんと事実を書いておいたばかりだ。みんな総出になつて、あんなから騒ぎをする。原書くらゐ自分で調べてみるがいい。〉とでも書きそうな気がする。

注

- (1) 「善良な人間性への共感」(一)
- (2) 「随筆家列伝／佐々木邦(その二)」(昭61・1・1「諸君ノ十八」)
- (3) 「ユーモア縁結び」(『昭和国民文学全集付録26』[昭49・8、筑摩書房])
- (4) 鳥越信まとも「マスコミ児童文化の源流③」(昭36・7・10「日本

読書新聞」に拠る。

- (5) 「豊分居秘話」(『大衆文学大系月報22』[昭48・2・20、講談社])
- (6) 「現代日本文学大事典」(昭40・11・30、明治書院)の「佐々木邦」項。

- (7) 「大衆文学五十年」②(昭44・4・11「東京新聞9626」)。
- (8) 「佐々木邦全集1」(昭49・10・10、講談社)の「解説」。
- (9) (3)に同じ。ただし、〈その証拠に〉以下は初出になく、「文壇うちそと」(昭50・8・20、筑摩書房)所収時の加筆部分。
- (10) 「日本近代文学大事典二」(昭52・11・18、講談社)の「佐々木邦」項。

- (11) 「圏外近代文学史(九)『日本近代文学大系月報54』(昭49・4、角川書店)。

- (12) 「佐々木邦全集2」(昭49・11・20、講談社)の「解説」。ちなみに吉田貞一「佐々木邦さんと岡山」(昭27・3・1「新文明二3」)が「マーク・トウェンのA Bad Boy's Diary」と記すのは誤である。

- (13) 「佐々木邦の人と作品」(一)
- (14) 「夢の王国2」(昭54・6・25「TBS」調査情報24)。
- (15) 「佐々木邦」(昭59・12・1「国文学解釈と鑑賞四十九」)。
- (16) ⑤前段は邦の見聞に基づくらしく、「髻と散髪」に「芝白金の明治学院に在学中は天神坂のサフラン床といふのへ行つた。」云々とある。